

## 戸畑「提灯山笠」と死者儀礼

Festival of "Chochin-Yamagasa" in Tobata,  
Kitakyushu City and Factors of Mortuary Ritual

金子毅

はじめに

- ①戸畑の成り立ちと「提灯山笠」
- ②「提灯山笠」を用いた死者儀礼とその周辺
- ③「提灯山笠」の出現に関する若干の試論

おわりに

### 【論文要旨】

本稿では、官営八幡製鉄所の開業（明治34年）に伴う地域の形成に注目しながら、北九州市の戸畑祇園祭における「提灯山笠」のシンボル形成という側面を考察の対象に取り上げた。

産業化の進展は多数の工業労働者をもたらし、かつては街道すら通っていなかった戸畑と八幡の人口を激増させた。両地域に伝わる祇園祭はそれで活気づいたが、やがて製鉄所の敷地利用計画の違いから、各々のその後が決定づけられることとなった。元来「提灯山笠」を有した枝光（八幡東区）には職員官舎が設置されたが、後日の拡張計画は、祭費の主要な財源だった職員たちの官舎の移転を招いた。一方、拡張計画による枝光市街地の狭小化は、職工官舎が置かれた戸畑への人口移動を促した。それとともに「提灯山笠」は、前者では消滅したのに対し、後者には巨大化という現象が生じてきたのである。所謂「光のピラミッド」の昇き手となったのは主に工業労働者などの外来者たちだったが、中には地域形成過程で転業した元農漁業者の在来民も含まれていた。

その後、戦争の深化に伴う形で「提灯山笠」には新たな意味が付随していく。それは死者儀礼的な要因であり、死者に対する生者の態度（慰霊—顕彰）、対象となる死者（個人—集団）に焦点を当てることで、①祇園祭に付随した現象で、「故人の遺影を掲げた山笠巡行」、②毎年8月15日に行なわれる、盆の「山笠奉納」、③同日の「山笠奉納」の傍ら、各寺院で実施される「精霊送り」、④功労のあった総代表の葬儀に際し、山笠を使用する「山笠葬」、という4つの類型が提示される。そこには近代国家の形成過程で演出された「提灯行列」との時期的重複とともに、寺社や製鉄所の主導によるのではない、住民自身の方法によった死者への哀悼意識の投影が指摘されるが、加えて“居住者とシンボル形成の歴史的関わり”といった新たな分析視角の可能性も見出される。

キーワード：提灯山笠、職工、慰霊／顕彰、死者儀礼、シンボル形成